落葉集

言語下

壱冊

太政官文庫
和書
類 八〇三
號 三九
函 四九
架 二
冊 五

内閣文庫
和書
類 八〇三
號 三五
冊 二
函 二〇八
架 一六

内閣文庫
番號 和 8033
冊數 25 (23)
函號 208 48

国立公文書館
National Archives of Japan

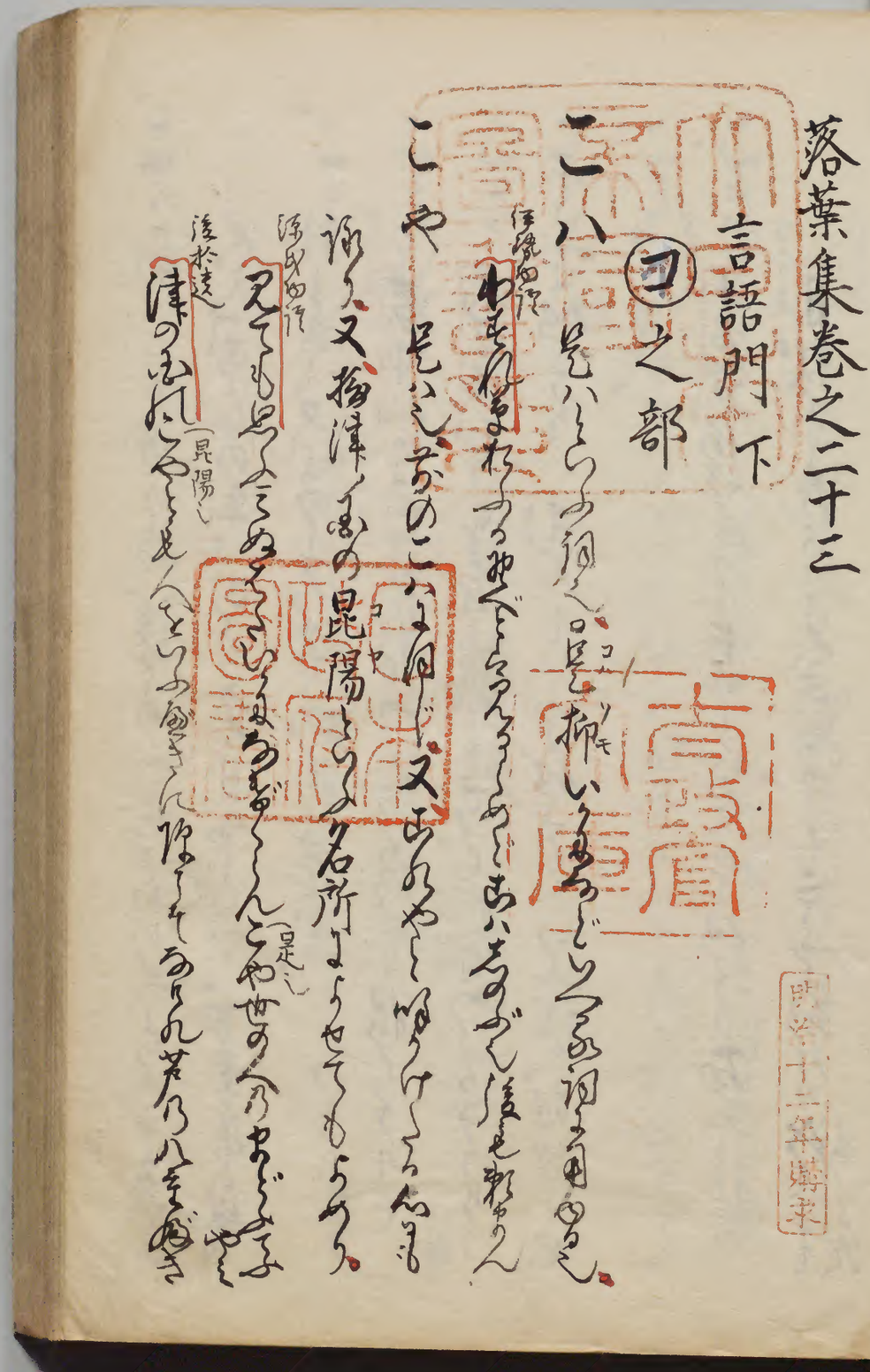
落葉集巻之二十三

言語門 下

コ之部

内閣文庫

明治十二年購求



こてら　巨々等と云。多くの人こてらの年こてらの人目なるごとく。万葉集に幾許と云。又多くの年わもと云。

古今集
世の中はいとゝはかなくなりまさる人こてらの人に限られぬ　光方

古今集
恋てなむ人こてらの人目つゝみなりける　清浦

こてふ　俗謂まれとも云。胡蝶と云。

万葉集
わが宿の梅の花ちるまがきに白雪こてふ似るもあやなし

古今集
月夜よし夜よしこてふ人つまどひ　こてふ似る

拾遺集
こてふ　似る

こきまぜく　うきまぜく。柳橋をこぎまぜて漕ぐ。

こきまれく　うきまれく。かきまれて見る。

こさはしる　小狭走と云。年魚などの水中を走る。

ことの葉ぐさ　言葉草とも言葉種とも。

ことゝはん　言将問と云。万葉集に出て、いざこと

とゝはぬ　諺と云。古人の言を流して、又俗言

詞（コトバザ）

こころばえ　意（コロバエ）の心緒（ココロ）の意氣（ココロ）の志（ココロ）操　並（ナラ）の用　又こころ
ばせともいふ。

こころざし　志（コロザシ）ともかく　又大度（コロザシ）ともかく。

こころ地　心地（コロチ）ともかく　又意地（コロチ）ともかく　俗に心根（コロネ）ともかく

こまやか　白文集に子細ともかく　コマヤカと訓ず　地のこまやか
なる。纖（コマヤカ）の密（コマヤカ）ともかく

こぼち　毀（コボチ）ともかく　物を手にてこぼちくだく　又やぶるともいふ　壞（コボチ）
ともかく

さいさい　殊更（コトサラ）ともかく　又故（コトサラ）ともかく

こがれ　憧（コガレ）ともかく　意（コヽロ）の定まらざる　又あくがるともいふ

恋ごころ　戀慕（コヒしたフ）ともかく　戀慕（レンボ）の事なり

恋ごころ　恋ごころとは　てふはどこともなく　恋ごころ
てふこんとやぶれたるなどいふ

恋きやなんで　恋きやなんで　なんぞ　どうぞ
問ふ

恋のやつこ　恋の奴（ヤツコ）　奴人つかふ者をいふ　恋
人のつかひまはるものをいふ

万葉集
まそかゞみおのがこゝろを今みれバ恋の奴ハ忘るべし
忘るゝ事の恋の奴か旅にても我のくせなりやつこと云

恋草 恋草とハ思ふ心のしげる事を草にたとへていふ 恋の事也

新勅撰
こひ草をちからぐるまに七車つみて恋らくわが心から

恋のせき 恋しき人のあひがたきを関にたとへて云

恋の山 恋のつもりたるを山にたとへて云 ○源氏 入りかたき也
迷ふ心を云ひ侍りて ぬしある物も文字ハ大學
紛れぬものなれど源

こし こしら物し こしや急ぎかへるゝなど源

こゝろ こゝびとゝ云詞 こゝろに今宵（コノタビ）

こち 此方（コハウ）也 ちハ道の略なるべし ○源氏初音よりいふ

こちなく 源氏若菜の巻に「こちなくしきこえなどして ばかりとも ○無骨（ナクコチ）しと云 俗に無愛想（アイサウ）なる者など云なり

こちなげ 是ハ心短（コヽロナガ）気し こちなくと同じ心也
なりぬ
やし

こちたし 是ハうるさきといふ心也 ことごとしき心もあり さハさハ
ぎしき 俗に云ことも ことごとしきなどかやうのごとし

こちごく　是ハ巨（キヨ）の字也。物の大（ヒ）なる也。おのこち
こちこハ別なり。
万葉集　萩の田にほむけのよるれからこそ[illegible]ねもころ
人どの侍ことさらく[illegible]れこたさいん[illegible]
こら　いざやこらやまとへ[illegible]此等（コラ）とあり。子と云ハ小児の
る[illegible]ざ人をとして子等（コラ）と称す。
こる　凝（コル）事。言ひとる事[illegible]まかなる也。
こゆる　超（コヨナツ）と云。超（コエル）するさき也。是よさきなる[illegible]
いふ[illegible]事[illegible]乱[illegible]燈（トモシビ）の[illegible]文（アミ）をひろげ[illegible]

[illegible]の人[illegible]とらそ[illegible]
[illegible]の人[illegible]古の聖賢の人[illegible]あはれなる[illegible]
[illegible]是[illegible]の[illegible]（ナガキミ）[illegible]
あれさく　[illegible]
こうじ　困（コン）の字[illegible]
このしめる　[illegible]
こうや　[illegible]
古今集　こひ[illegible]

こきたれて　高きなどの如きに登れば、又稲もいと
あらたれて　歳、重。為ちどなりてとある詞。
京の集　時はめぐりて　歳、重。為ちどなりてとある詞。
こうとれば　上の句の句の句乃ちぐりぬとなり。蜂腰と云。
信濃腰折とも云。蜂腰病とて哥の病なり。
あめきたる　たんめきたる。源氏物語にあり。
あめりき　見もたあめりきとあり。おのこ共きたるとある句。
こそせめ　こそもあれ。こそもあれとある句。へ言葉なり。

「音にて高くねなどの数しげ数の句あり。社
せん。これ、これ、ね日ど多くあり。社
こそぶて　事を省略(セウリヤク)して。別ケ省略(コトソギ)と云。源氏物語にあり。
こそぶる　事の足らざるなり。
ことぶる　事の略(コトヘ)し事なり。
ごとなぶ　如けなぶ。
云葉の花　和歌をいへり。
云葉の源　和歌の源。源遠(ミナモト)なると源の源きよ
とていなり。

あやしまいで　言はまいでとて見る事の言(コトバ)に出る也

六帖
言に出ていはぬばかりぞみなせ川下に流れて恋ひわたるらん

あはざらん　是ハ誰が為(タメ)といふ事也

木幡(コハタ)川あさぐたなびく夜と誰がひきし見る雉(ツヽ)の声かれ　定家

あさげの男や　妻も娶らぬ男だといふ也

あらそひもなし　二義あり　一ハ言(コト)もなき也　一ハ何事もなひ出る事もなき也

古今集
あらそへばあらそひもあれど限りありいづくハ秋乃なかばて夜ハ

日
秋の野に名のみ残りて遂にハあらそひもあれど限りあらむと

あやしぐさ　言種(コトグサ)也　人のものいふ言葉也　又是ぐさとも

拾遺集
山里に訪(ト)ひ来る人のことぐさはこの住まひこそうらやまれけれ

あやのことぐさ　前に同じ　又和哥の事とも云

言の葉の林(ハヤシ)　和哥の事をいふ也

こやつてまし　こぞつて世申也

ことしあれば　事あればかし　一ハ使ふ字也

こりずま　懲りもせずといふ事也　まハ須磨也　こりずまの海士のうらみあまたつくるとハ須磨の浦より出ていふ也

古今集
こりずまに又もなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にしすまへば

古今集
いつはりを千束(チツカ)たりぬとも錦木は……なりける

こがくれ　木の陰(カゲ)に身を隠す也。

こぐれ　木暗(コグレ)ともいふ。木の隠れたるをいふ也。
あら吹木(コ)ぐれの夏……さやの中山

こんよ　こん身とも来(リ)る身とし来(コ)ぬ身にあらん。又来世(コンセ)ハ後の世をいふ也。

こよろぎいそぐ　小余綾(コヨロギ)ハ相模ノ国の名所也。それを急ぐ事にかけていへり。源氏帚木の巻に「あらんにこそ……こよろぎのいそぎあゆむ……とよめる詞あり。こよろぎいそぐと詞なり。

こまなへて　駒をならべてといふ事をなめてとよむべし。

こまのつまづき　人に劣りて人のあとにつく類ハつまづくといへり。

俊頼集
しらぬ人神がゆるしき……駒のつまづく度にぐげん

むかまく　源氏若菜の巻に「……の鈴ひゆるゝ……ゆゝしき

むかまへ　……月……のんと

むいつき　今云気のいれぬといふ也。

むべくとすぐれて　源氏末摘花の巻に「あさましくんぞと

過(スグ)るゝ事もあげなりとぞ。今の人みだりに〳〵いふハ非と云ひ
とがめぬはみだりにひがごといふが如し。
んば只　胸のさわぎ事く。胸さわぎなどいひて
こりずま　ことをわするゝなり。
あぶる　雨ふればこゝかしこにあふれて流れさるなり
溢(コボル)ゝといふ心也。満(ミツ)の字をもコボルゝと訓(ヨミ)あり。
雨降の満(コボル)とかきてあふるとよむ也。あふれたる水を破(ヤブ)るゝ
意也。又ハ橋のこぼれともいへり。
万葉集
小墾田の板田の橋乃こぼれなばけたよりゆかんなこひそわぎもこ

ほ落て蓋(?)のかきくれたる板田乃橋のわたれたる橋
一　おとなしべ　かくのごとくいふべし。
古今集
おとにのみきくのしら露よるはおきてひるはおもひにあへずけぬべし　素性
後撰集
おとなしの滝のみなかみ人しれずもらすなみだはかはりしものを
おとなしふ　事なきさまにもてなす也。
古今集
村鳥のたちにし我名いまさらにことなしぶともしるしあらめや
ことゝきゝつゝ　詞ときこゆれども心はきこえずと落ても聞こゆる也
云ひしもの定めぬ也。
こもり(ツゝミ)　あさましく不打もるゝ也。

あとぶる　詞をほめたるうた。言霊と云くだりなり。

あとるあるうて　罪とあるうたの詞。

あるうつぶし　相撲をとる事。

こえたるもう　手なれたるうたのこと。

こもものつぶ　神楽の風俗、一説に蒜と称せるこもものつぶ。

こち　骨ともいふ。源氏場形の中にけそい畢く河ぶみく骨のけぶるこの名ハ骨ハ毛骨。

俗に思ひあり物を骨ともいふ。

ことわり　理とも断とも俗にいふ事。

ことのついで　事の序といふ事。

ことあらに　殊更とも故とも。俗

ものくるいなり。

ものの鬼　源氏物語にえうり、正法念経を云、閻羅獄卒ハ

非実有情、以衆生妄業力、故見之と云云

社　本朝語之辞也、社れたるけるテニハ。

さいぐの花受　聖武天皇の御字。奥州小田とふ山より

初て金を奉りしより世の宝。

さて念ころにきこえしさまを人にもあらはしみちのくにまでおもひも
心の駒よ手綱ゆるさな　潙山警策ニ云、如悪馬不以轡
將ニ牽ントスル人ヲ陥於阬陥ニト云云。此語のごとく悪馬ハ轡を
免しておけば牽人のみならず阬へおとし入るべし人の心も
亦かくのごとし。よく〳〵おもふべし
ひかれなほあらそふこそ大なる思ひしんの駒よ手綱ゆるされ

此世ハ仮の宿　李太白ガ語ニ云、夫レ天地ハ者萬物之逆旅、光
陰者百代之過客而浮世ハ若夢ト云云。俊成五社百首、
いづこにも旅のそらなる世の中にかりそめならぬ世ハ仮の宿とこそ見けれ

江南の橘江北に移せば枳となれ　周礼ニ云、橘踰淮北ニ
爲ル枳ト。ロ説苑ニ云、江南ニ有リ橘、齊王使ニ人ヲシテ取ラシム之ヲ而樹ユ之ヲ於
江南ニ爲ル橘、江北ニ爲ル枳、所以ユエンハ然ル者何ゾヤ。其土地使ルシム之ヲ然ラ也ト云云
木集ニ
ところからかはるこのみのうつし植てやすむ時はもなく
かくのこのみハ蜜柑の事なり。ロ舜水談綺ニ云、橘子ハ柑ト
同じ事なり。又ロ詩格ノ註ニ云、柑ハ橘ノ属ニテ滋味甜美特異ナリ。
とかれバ、蜜柑と橘子とは同物なりといへども、合はれども
右の歌の心ハ橘蜜柑同物のごとく

心の松心乃杦 心の松とハ貞操(テイソウ)ありて色の変らぬ心を
松に喩(タトヘ)たる詞也 心の杦とハ人の心乃直(スグ)なるを云詞也

虎穴(コケツ)に陥(オチ入) 偽言にだまされ金をまきあげられ謀計(ボウケイ)におち入り
命を失ふことをいふ

㋓ エ 之部

えにし 縁也 縁の字をエニと訓す 又えにしとも云也
縁にのみよりひとつもの也 えにしてそあるらめなど云ハ
縁ありけれバ 江 ロ 江にハ深き江にそへて詠り

後撰集
あふ事のかたきなげきに年を経てうらみなほえにしあれ 恋

新勅撰
人心あふの浦にしもえにしあれバ綱の川もとにもよりけり

えにしをつゝぬる 連理(レン)の枝也 縁をむすぶをいふ

えぞしらぬ 不知也 しらずといふ事也

えならぬ 殊勝(エナラヌ)と云事也 えもいはれぬおもしろき事也 又深き
事などによそへてよめり 又さもあらぬ事ハにほひ
いつかたにもそへて叶ハぬ事をいひ言ふまじき詞の
こゝろ也 又えならぬとハことばのいはれぬことをいへバ源氏物語の詞也

拾遺
いそげなきころの一声ゆかしさに菖蒲(アヤメ)にかゝるむ宿のえならぬ

えやはいつまで　えやは[illegible]「えやはいつまでぞ」[illegible]
れをせどとうるほく　仔[illegible]
詞花集
かくとだにえやはいぶきのさしもぐさ[illegible]
えもいはぬこころ　云[illegible]
あとをわかんもいひ人[illegible]
ぐるとなるつまとなる
[illegible]人の[illegible]
隣会せこの[illegible]
[illegible]　[illegible]

えもいはぬ　[illegible]
えてんらく　越天楽ハ[illegible]楽の名し琴ゆてに落組
えんわうの鵠　鴛鴦ハ[illegible]契し鴛鴦ハ[illegible]
[illegible]　涅槃経云
鳥有二種一六名迦隣提二六名鴛鴦遊止其俱不相捨
[illegible]
えだなくば　不鳴條[illegible]西京雜記云太平ノ世ニハ則
風不鳴條雨不破塊[illegible]云條ハ枝也
えみ　咲[illegible]

○咲ハ笑と同し

敢（エ）

不敢知（エ）不敢来（ラ）この類ひ日本紀見てし俗得（エ）の字を用ひ

役（エダヒ）

役（ヤク）といふるし役儀の役（ヤク）役職し又任（ニン）所を役と云し

ものをエダチと和訓ス

會釋（シヤク）

心を會（エ）得（トリ）して解釋（ケシヤク）ものし又應答（アシライ）とも會釈とも

いふし

詠（エイズ）

声を長く引て歌ふし故に和哥を詠歌（エイカ）とも

テ之部

てふ

てふとも蝶ハとも云ふ

なと云類くとも云ふ又捨（ステ）のてふとも

ふるきもあり又あてもてふ毛ハ花のるもんバ

あらんけ花のもあるし けあらんてふハものもる詞なし

一チやうも思ふ屋ふ云ハ止（テフ）云と也

古今集

ちはやふるかみよ聞てしのちも聞ても

小野小町

てふハ ト部兼倶ノ神代ノ鈔云 てふハとも出葉（テニハ）とも云し

草木ノ葉無キ時ハ何ノ木何の草と云ること

葉ものを付て云ふ名を知らぬ漢字（カン）の解（ゲ）

なるべし 倭字ノ出葉（テニハ）と付レバ云あらんの安と葉ものの万木の

名を初るごとし、倭俗の手小葉、あるひは手小於葉と云、
其理、易く聞こえたり、○出干葉ハ神書よりいでたり、○手爾乎葉ハ
万葉集の跋にくはしく
もとより体なし、もとより体なし、もとより体なし、
もとより用なし、もとより用なし、もとより用なし、
もとより体なし、もとより用なし、もとより体用なし、
もとより体用なし、もとより体用なし、又もとより
もとより体用なし、もとより体用なし、大境、右京亮顕忠説をは
もづらしすまひひとたち

もまごひ　もたるものつかぬるもし、宮仕の術を物語よりさる
もまごひとして第ちうとうとうとうとうとうとうとう
てずさこと　もものごとさこと物をとりてあそびうたうたう
てなのくふうたてもて　もなるうのもとうとうるし、
もものもゆうた　日本紀よりもの玲瓏と手ゆうもしもくし、
又もづるゆうとしいふ乙女よりもものもよ衣手
など詠て一説機を織る梭とうあとちかく詠つる
るもしもて、

もちのもゆうもゆうもとる機のもとしもちうふ出の戸ウ形　定家

[illegible]せちんれいのこと　源氏常箒の巻にあり、兄八双六を
[illegible]時のさゝをとりてよき目と手もあらんとそろそろ[illegible]修
[illegible]ぶでは月がもてくれよりとをきまりんで
[illegible]

[illegible]やく　ねゝあるこてこちらをとゞと焼くこと、四十二章
経云、佛愛欲人猶執炬逆風而行必有焼手之患云、
てうがう　眺望　[illegible]
海眺望
[illegible]浪のゝ[illegible]あゞ[illegible]
てうど　調度　一切の道具をとり、漢書註蓄調

度　[illegible]も一切の器、花[illegible]漢の倭乃[illegible]
度ども[illegible]又源氏物語[illegible]
[illegible]多くかりそめの皆乃具の事をとり、

條　條ハ木の小枝、俗文ニ石を條[illegible]木の小枝乃
細よわ[illegible]

朝三暮四の営　荘子齊物論ニ云、狙公茅を賦て曰、朝三ツ
[illegible]て暮四ツ[illegible]衆狙皆怒又曰、[illegible]
暮三ツ[illegible]衆狙[illegible]云愚人を養ふもふかくの
[illegible]此ノ朝三暮四の心をもて[illegible]兄を朝三暮四の

豢ともいへり

田鼠化為鴽　此ノ田鼡ハ鼴鼠也田鼡の鶉に為りて鳴なり

とは田鼡といふハ別に田に住ム鼡のなるを見たれども尓ハあらん

あるらんにろかちのまゝ

天に跼地に蹐とて　詩ニ云謂天蓋高不敢不跼謂地蓋厚不敢不蹐　恐懼之至極也　註ニ跼ハ曲也蹐ハ累足也

跼一本作局

㋐之部

あはれ

三首あり　一ニハ花もなきらん　二ニハあはれのん　三ニハ

哀れは出来るといふ所とふべき月日されどもすゝむ七ツ八ツと

このゝ哀れなるらん

新古今
あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬ宮城野の原

此歌のあはれハ嘆きたるらん

同
あはれなりいかにしづかの人草葉の露にかゝるの風にきえまほしき

同
紅葉ゝ紅葉も哀れに志るまれり暁も床の秋ぞ知らる

此二首のあはれは哀のらん

杉岐辞世
ものおもふ身の秋の風にさそはれてすゝむあはれの月をみるかな
杉岐

此歌のあはれは天晴のらん　表に哀れに出でつゝまでぞ感ずるハ

天晴(アマバレ)し

あべこ　見も二度あり。一ハ[illegible]ハ堪(クエ)ぬ

[illegible]ハ堪(クエ)ぬ

古今集

もゝそあゆ風[illegible]の陽籠(ミガキ)よそ苔も秋らあべこ[illegible]

はあべこ[illegible]不堪(ザル タエ)し。ゆんすんせぬ

拾遺集

秋ぐれ時あべ風[illegible]

はあべこ秋ぐれ[illegible]定めぬ[illegible]

ぬんく

古今集

山あべ風の[illegible]

山あべこぬ[illegible]つぎ[illegible]

古今集

秋風あべこ[illegible]

[illegible]あべこ秋[illegible]

あぐ〜鼓　あぐ[illegible]

あぐ浪　意よりもて御入

金葉集

[illegible]

あやる　文[illegible]のしと異[illegible]

[illegible]

古今集

山[illegible]あやる[illegible]

後拾遺

[illegible]

同

[illegible]

拾遺集

[illegible]

あやめもとうぬ　文目（ヲヒメ）のとうぬ　あやめも[illegible]

[illegible]

古今集

[illegible]

[illegible]

あくら　[illegible]

あなうや　呼（カケ）ぶ[illegible]

[illegible]

奇怪（ケカイ）　[illegible]

人[illegible]

[illegible]

古今集

[illegible]

あはれ　哀（アハレ）[illegible]

又[illegible]

[illegible]

[illegible]

註

あさり　源氏物語の巻名　[illegible]

[illegible]

と云ふ。あるいは云ハ搜の義。[illegible]

[illegible]

あるふ　あるとハ。アラとも用ひ。あるいはの俗

[illegible]アラ。アナ。ラとナと同音し。阿那とも[illegible]

[illegible]切なるとあるとて。

あるふくや　生憎とも。あるふくさ。又赤憎とも生

憎とも云ふ。

あやなし　無文とも無益とも書り。無文ハ物の文彩なき

無益ハ詮なき甲斐なきもの[illegible]

あやなし

古今集

[illegible]

伊勢物語

[illegible]

[illegible]

古今集

[illegible]

あやまちきるさ　左右。左様。右様。あやまちきるさ[illegible]

云ハ右きもたるもの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるる〳〵　金比羅といふなり又一説に撫でるとかんこんもいつ

あれ〳〵見ひ給へ　あぢきなくもあるかな

あるる〳〵　いるるとしるしるあの事なり

ちるるぞ　おもしひとりあれもしるる花ばかりなく　小野山前

けひとりとは、宮の事なり、昨年くとは、昨年なるべし

あるるあ〳〵　金名ゆゑ云、業平朝臣、あの花どもをえんとて京の

方ひとりみちのくにいたりて、やまと国にあるて都なる

なる歌、ゆゆゆゆゆゆの上の句、あるあゆゆ、花ば

えて声をたるぐるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

死人の所ひとりを、あるるおれをるるるかのどちのもの

用の完ようる落ちん一のをもひとりをもの風をあむる

音のかくやえるものいづあゆゆくひるるるの人ひるるを

同所のるゆるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

けるるて金れるるるる、即千かの所見るしと云、業平をを

いるあるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

ちるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

を

玉造小野にて云りとあり

あるたのこゝろ　ひゝたのこゝろ　やとらるゝ

あるゞち　ひなのゝこゝろ　又強　ちぬてあとらるゝ

あゝらゝまゝり　源氏物語よりいでたるのもぢ　あゝよゝる

ゝらとる。あゝ、奥の字なれて　あるゞけるゞとつゝ奥の

んゝ、未詳　のゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

あのゝとや　足音　ゝ

あくゞゝ　浮岩。狂浮。憧

ゝひ　ゝ

あぢきなし　古語拾遺　無為　ゝ　ゝ　ゝ　日本

紀　無道　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　秘説　無味氣　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝの畧訓　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

古人ゝ集

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

あさましかりけり　けふハ勝の字まさりたるもの也

りう今ハ海ちゝんけのよはく淀もゞ

ありふる　有経（アリフル）世の中にみとくに年月を経るに

ありこしも　みとも侍しハ儒なん

あつまつ　みもあつ　のやあつ　あつ　あつ

あつきあつ　いあつ　あつきあつ

とゝ　古　せん　ぬ　ん

あつのやあつ　あつのまつ　あつ

後拾遺

むとゝそゞあつのまつ　都をたのるんにものうせて

和泉式部

あるふもあつ　あつもあつ　あつ

あつふり　青丹（アヲニヨシ）奈良（ナラ）いとん花何　奈良

ふり　青丹吾　京

青丹きの見の志いづ　がらつ

あつさ　白地（アカラサマ）苟日且　かつ　あつ　又初

てのんとのまれるんにもつて　又偷間（ヌスラサマ）。只暫日　並て何

山里人あつ　ものもの　ものと

あつあもせぬ　ようも　ものと

あつねつて　日　ん花何　あつ　ものつ

茜刺（アカネサス）とゝ

新古今
家集
清輔

ゆくへなき空の雲にはつげなん豊のあらしの吹ぬまに

世の中にいとゞ思ひのまさるかな秋の夕の長雨

あつまぢあらし　ちあらしつゝ　ちあらし　はきはらの所まで

濡るゝ　ちあらしひとも云

文治集

秋ふかみ風ひやゝかにふきぬれば

あるゝこゝろ　安芸ゝ　芦ゝ

泡沫仏ゝ　伝ゝ

あひしてゝ　ねの不お面のまをひとしてゝ

あるゝ　ねのて　あるゝのねてゝ　山ゝ

あるゝのこゝ　あゝ　ゝ

あゞあゝよ　立ゝ　ゝ　ゝ　逢ゝ

あゝゝ　菊ゝ　ゝ　ゝ　又ゝ　ゝの山ゝ

いつゝ山ゝと　ゝ　ゝ

あゝもを　ゝ人ゝ　ゝ

あゝゝ　ゝ　ゝ

あやふく　ゝ　ゝ　源氏ゝ　ゝ　あや

ふくゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

あゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　又ゝ　ゝ

清輔

[illegible]

新古今

[illegible]

清輔

[illegible]

あぶな

海雲（アマナル）とも雲踏とも。あやきんこ。

あごこのつる　細引（アビキ）とも。細引とも。

そ細引くとあり。海とも。一説よ細の身（グ）とも。

しとも。け従有也。[illegible]

万葉集

[illegible]

あさたら　海くとも。又海謀（アカ）とも。あさたら

[illegible]

あさる　求食（アサル）とも。あさる雑（ゾウ）。あさるとも。海

あさるとも。魚の食をあさる。

あざむく　欺（アザムク）とも。偽りすとも。[illegible]

くとも。されども前従の又二の目れ。

偽りあざむくとも。昨見る園の書方よあざむく

見ハ昨見。あざむくのくるあく

文選集

蓮ものの海よりもまのんりてるふの高紙ものあざむく

見ハ蓮ものとも毛とも。

荒(アレ)文字(モジ)　荒の葉形りよ云くし一説ニ文字の中よ草よ本文ハ
生類なとを鈴ふくと云とも也

あせそ　あゝせて「あせたくるなとらぶいづれも瘦(ヤセ)の字也
又あせるハ物のなのうとうて落くなりるをいふ

あいろごいろ　何ありもなくてもなく
ひきもなきあいろもいろの山鐘庸ゝ風そよとなり　中

あへつけ　あへしらしき事也

あきれがひ　當りまし餌(エ)を飼(カ)ふ也
さゝ當りのあきのものやらはうあんりそ風あきれがひして　仲正

何やなしや　気らをいふなり
ゆきもふ事をいひもびぬ隅田川よき友舟ハありやなしやと　定家

あらひく　あきらかなる文明(アカ)し「あらひくなるたくのすと
語文「秋のまでかくよあらひく日もつきまでとふ
兄ハ終日(シウジツ)目の赤きよし　八文値ハあらひくハ目の明(アカ)るき也
ともあふ説よ同し　△又紅(クレナイ)のはらをあらびののすめや紅也

あらぬ事ハあらぬ　万事よ不足なく云事也

あれまく　荒(アル)るそのもまくを添字なり

何つらく　人よりものを云ひ僻つるをいふ也

あさうまよ　悪（アナカシ）　[illegible]

制しらる風

[illegible]

[illegible]の[illegible]（イキリ）

あるやらん　[illegible]

金葉集

[illegible]

あさまし　[illegible]

のゆを「あさましのこもりやと」

金葉集

あさましの[illegible]

あさましの

[illegible]

[illegible]（元方）

あさましの　有端（アサハル）　人の中[illegible]

あざましあり　朝敢（アサミアリ）　人こそてあざましう[illegible]

秋しもまれ　秋もあのばしいはなし

[illegible]

あさら「あさら[illegible]」

[illegible]

あらどうん　不獻見くゝめぐのせばくらつるゝ。

あるぐらう　穿鑿とゝ〳〵郎子せんさくそうまゝ最明寺

時頼入道、話あとをたのびめづくて、國〳〵のあるさまをあ

ぐらう見ゆるものあるも、一こゝろせんさくちかのとゝ

まゝ、増法と生ゝ。

あぢきなし　あるゝ〳〵くれぐれ註ぐらゆゝ文字に

そのゝ出ゝ沢〳〵人会をぐ人情を五味〳〵〳〵

心ゝ〳〵耳味ゝ〳〵ひ。組ゝ〳〵ゝ辛味ゝ〳〵ゝ

んよかるゝで情のあさをあぢきなのゝ。信ゝ

ふぐ〳〵しきゝゝ〳〵ふぐ〳〵。無情の無益の無端の無道

無狀ゝのゝとあぢきなゝと讀もゝのゝ。

あてはう　人の容貌のゝわゝきあてゝは上ゝゝ〳〵ウハ

の切　アゝはゝ形容詞ゝ。

あいだをてう　源氏夕貌の巻「さとでゝまゝけぬゝ

あいだをゝゝ口先ゝ。

あてびて　源氏東屋の巻「あてびてもたゝ〳〵ゝ

あてゝは貴人と云ゝ。貴人なゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ

ゝはゝゝゝゝぬと云ゝ。あてびは貴人ぶゝ〳〵ブリノ切

ビ

あハくしく　清く爽し。清く爽しいとぎりく爽し。又清潔のん
ゆゆしき詞

あなかしこ　穴賢と書り。あなかしこ
云詞。源氏の奉の書中に言ひ知てあなかし
何くと侵さるべき詞。あなかしこ人なゆゆしき
などゝ云り。又文の末に用ひくる。穴賢と留る。上代八倭漢
そりて家を造る事を云へば人く穴をかりて住居
もるゆゑ恙虫人を螫しけゆゑ本朝の書れの素盞嗚

穴賢の二字をめくらも居所の穴を賢くとゞめるべて
恙虫を防ぐべしと云云。

無狀　此一條前にも西所に出たれども註なれば又宮の角と
無ス　三所合せんとの。古事記云。素盞烏尊所行無狀と
ゆり。又母爲とも書り。

あぢ茂よ　朝茂つく。

鉾りらひ　おとらん拔詞。又鉾のようひきのおとらで
もつく

あるもさん　日とらん拔詞。あるもさん鉾りらひ

彩げ　彩開（アサビラキ）とゝのゝ。万葉集より出る。又。朝朗（アサボラケ）。明

卒去の事。万葉の事。方の事。拾中細言定頼ノ分

彩げ　只、彩の事。彩げの事。彩げの事。

魚ハ時候門より出る。

見と宣ふ　源氏物語より。あるをたゝかせ。たゝ

まうでのひぬるを。いとゞあはれ。

天降（アマクダル）　天降（ソラクダル）。又あまくだる。神代巻より。

天降（アマクダル）とゝのゝ。皇居の地より。他國へ行幸の事をいふ。

雨電雪霜ゝのゝ。雪中ゝ。

上ゝゝ梅の裏をきる。帝王を天子と申し奉り。禁裏を雲

上と唱へ。臣下を月卿雲客と稱ゝ。比ゝ

ゝ。神人の聖智あるを云。ゝんで虚空を

うきゝ。水中ゝ。玉りんや。虚空ゝ。

水中ゝ魚影。魚影。

あやあもわゝ　不別（アヤメモワカズ）黒白ゝ。物の色の黒白

わゝ。又。文目（アヤメ）も不別（ワカズ）。又。不知（アヤメモシラズ）善悪

ゝハ

物の名あるもあるべしとて、

あるじ　郷食應と云ふ。即チ郷食應のこと。俗ニ客ぶるまひのこと。

あづまあそび　東遊と云。傳て云、安閑帝の御宇、駿州有度の濱ニ天女降臨して哥舞を爲て、道守翁其ノ曲を世ニ伝ふ。俗ニ是を駿河舞と云。又羽衣の曲ともいふ。又㊀ノ説ノ如し。

彩起の家ニハ福来　山崎敬義文集ニ大黒夷子記云、夷子ハ早旦ニ起テ火ヲ焼キ爲事家ニ故ニ名火寄子。是蛭子也と云。此の説の意ハ朝早く起ハ家の栄遅く起ハ家衰ふと云ふ。

あんばい　鹽梅ハ羹を和するハ必ず塩と梅とを用ふ。そこを指ていふ。尚書説命ニ出タリ。尚書の意ハ鹽梅適中して羹を調ふ如く臣下の君ニ事ハ剛柔可否相濟て其徳を成ス喩フ。

愛敬　儒ニ所謂愛ハ仁ノ端也、敬ハ礼ノ端也、皆己ガ天徳の發ル所ニして外ニ徇ヒあらハ愛敬の立ツ事親ニ始リて家ニ施シ國ニ至リて天下ニ達スと云。俗語の愛敬と云ハ

佛者の言ふ本(モトヅ)くゝ又面貌(メンバウ)愛相(アイサウ)あることゝて

廿之部

さハ　さゝびとゝ云ふ人ぺ人ふたゝびの新しく又一説ゝさうハ
とゝ云ふもゝて

さや　たゝたのゝばとゝてるゝ

さらび　たゝたのゝばとゝてるゝ

さゝめぐゝ　たゝのめぐゝ　酒(カヅ)のさゝやゝあゝめぐる新
みとゝ書てゝやあるとゝ

さゝる　たゝたゝとゝまゝ

神ゝ時けさゝる新の男もゝて上男うかゝあゝ風
さなゝても　たゝたゝでもゝ
さなゝぐゝ　そゝきゝとゝまゝ
さゝぞる　さゝぞあゝんさゝめゝ
ゝのもゝのゝさゝぞゝとゝて又ぶゝもとゝ
新古今　義八神ゝ初たゝのゝ時ゝさゝぞゝる
日　ゆゝゝめ外山の春の花ざかりゝ　太上天皇
拾遺　たゝのゝ月さゝぞゝるたゝのゝとなゝ　太政大臣
定家　ゝぞゝ月のゝ家
さもあゝべゝの者　任他(サモアラバアレ)。教他(日)。従(日)渠(ゝ)のゝどゝ。さゝもあゝべ

あれくちまつせくうんこ　あとは　訓あるぶ　ゆきるれどさし
ありれば　ぜん　ぜんあり　けくは　ハ　ようもあるべあれとうかるよ
月ゆて　又　遮莫（サモアラバアレ）　ともあり　俗よどかの　ふるかの　ふるも　何の　俗と
いつ　まく
千載集
見ひとも　ちて　人ぶる　まつ　ばあん　うれと　見りぬ　ん　もれ
別　古今
さもあらば　いのち　ながら　ゆく　ものを　ものの　ことに　あるを　ぬむ　何ぐ
ざれ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ
ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ
ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ
ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ
ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ　ものの　べ

さぶ　負（サブ）　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

さける　避（サケル）　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

さち　さいわひ　幸（コウ）　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

里なのり　里のあるもの問ふと云ふ山ふかみ里より

里とびられぬ　里とさらめどしうれぬ不離（スカレ）と手り。

里びとる　里刑しるし。里びとるなの声なと云ふ。里鄙（サトビ）と

さらげなる　さらげなるきくの花の弾。信のこと

新古今　夜の面ちまぐはぬさらげるもの形政

さとへなる　さとへなるてい

さぬる　少寝（サヌル）と云ふ。すこし寝る。

さぬらく　あのさぬらく向ふ。らくは語なり。

万葉集　さぬらくらあのをとぐらくなのちに冨士乃高根乃佐（サ）ぬのごと

さぬるさ　あのさぬるさ向ふ下のさのなる語なり。

さぬれて　小濡（サヌレ）てしぼりあれて

さうゆく　賞（ユク）しりあをを吸（サカエク）よりもてもの語

さかしき　賢（サカシキ）のなる。又、明達（サカトキ）とも云ふ。かしこき。

さとし　聰明（サトシ）の智の慧なること云ふ。発明（ハツメイ）なる事。

さがなき　不祥（サカナシ）の無善（ヨ）なること。あしきること。人のとのをひ

さがめくきあどつハとの云ひのふくさげよ悪敬し又一説よ
不祥をサカナしと訓り即善し日本紀事既不祥とあり
さ祥こん　河内国云ふくまんこと又実ふまんこと
もあり
[illegible]
[illegible]
さこん　一向ふこんこと又ふくふくよこと初のるし　ゆくふあて彩
しさこん
さこんこと　あるいはさこんこと　ちゆうこと
さこんぬ別き　不云別このごとくぬおとこ事
[illegible]
さこめごと　私語密語ごとく夫婦ぬそうおこなふこと
[illegible]
さごら　讒言こめつくの中言ことひ中ありくとる
さやこ　その告あることつて　その聰明こん別ッし
さごあう　あのかきとさごやうこと
さこらこ　さこらえこもつて左迂こと

匡方

さるものの　双のきものと堂塊とう事し。

ざれごと　戯言（ザレコト）あいぬを言（ゴト）し。

さることと　さわぐ。その言つをいつて。惜後て云。あるを小

ちゆぐうし　双広（ナラビヒロ）などつてそなりしいくあちらけを

さるぬる　さのぬ新くいとこうとうり。

さるゆう　る細（ニサ）とうし。惜て云。何てあ新らつ月し。

さぐ〳〵　さぐうのうる分明（フンメイ）なうし。

さだすぎる　さぐとん（コト）ちゆ。さ時とうるとる新るそ

男小さぐ蓋（ツツ）の色き沈ちる嫁入りさかりのうるを

定（サダスギ）てうとう源氏物語てうし。

さぐのあうやき　梯を髮の垂（タラ）つ巻のあ垂（タラ）ば焼てかけく

いて。

さ〳〵いらく　人のおちひうけうら退辞し。

さちのうと　毎よ梯さた人の頭てく。

さるぐら　二巻あう。一ハさるぐうとうのさ

居(ヰ)ながらにして一つに出さしといふ事なり　右大臣

於迸集
さりともあひかさなるかくてある世に露をとゞめ　伊勢

日
杉田のうれもれる田鶴のさわぐ声のみなけかの浦

源氏物語
さしながら昔を今につたふれバ玉の小櫛(ツゲ)ぞかみさびにける

さそふ　誘引と書て又听(サソフ)とも書いざなふといふ事也「む

さそふハ花を風がいざなふ也

古今集
侘ぬれバ身を浮草の根をたえて誘ふ水あらバいなんとぞ思ふ　小野小町

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり　公經(キンツネ)

前の心ハ庭上の花を雪とみなしてけしきの庭乃雪ならで

前の歌ハ花のあたりにこもりゐて観念(クハンネン)していると也

身の老をかなしむ心をいふ也終にこもるといふ心也

さむらし　寂むらふと云也　寂しと濁(ニゴ)る時ハ寂し

くらぶると云事也

さゞれ石　さゞれいしとよむ也

さぐる　探(サグル)の字也又そ物をさぐる也

於遺集
うつゝにと思ひし妹(イモ)を夢にぞ見てさぐるにあらぬさびしさ

さやか　さえやかの略にて清朗(セイロウ)の事也物のあざやかなる

にあり

古今集

[illegible]

さゝめく　さゝやく　さゝめごと　耳言（サヽメコト）　みゝごと　訓

さゝやき　細々（サヽヤカ）　詳しく　さゝやかなる　さゝやかなる　塩

さゝぐ　縛適（タンラキ）　ふくらかなる　源氏帚

木の巻　源氏　さゝぐ　ふくらし　月の源と合

とゝ　又同書　月の　源氏　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ

ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ

敏行

いゝ　いゝ　いゝ　いゝ　いゝ　いゝ　いゝ　いゝ

世尊寺　世尊寺　源氏　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ

さのぼる　田を植ゑ　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ

さゞる　結ぶ　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ

[illegible]

さゝる　細（サヽイ）　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ　さゝぐ

猿楽（サルガク）　猿楽の　猿楽

聖德太子秦川勝に仰せて六面の假面を作り内裏
紫震殿の前にて人々に示給へらる。時に太子その神
樂の神の面と樂の面と二つをもて申樂とし給ふ。
のひいらこ
さいだら　催馬樂とも云。佛調物をとこぐる馬子の唱へる
謌しを何をとこて唱ひしを、催馬樂といへり。
さうぬまん　俗間の書に音樂を想夫戀と云あり。と記せり。
今按ずるに、阜氏藻林云、相府蓮ハ樂府歌也。王儉爲
南齊ノ相一時所辟皆才名士時人以爲入儉府爲蓮
華也。謂如紅蓮映綠水今號蓮幕者自儉始。後笛
曲訛作想夫憐と云云。然れども想夫戀と記ハいよ〳〵誤れり。
風　風の声。颯と吹くハ風のさわぐ音をもて又ざざめ
いるも松風の音なるべし。
清潔　清明なる玲瓏なる月などの澄てをもて玲瓏
光明しすきとおるをいふ。そのいろふ見る貝ナリ。
依俳　髪髢ともいふ。又彷彿と書。それらあるぬると訓ス
を形容することばなれども云ふとわるるまでもなし
詞。

宛然　依然そも宛爾とも共、万葉集に、皆悉ともあり、又
乍皆とも云、訓とくふとも云、俗に乍左とかく、
流石　俗にあの字を流と書く、據孫楚漱石之事。
と云云。蒙求に出たり、又。有繫。迫。雅亜。
偖　本朝の俗。然の字を用ひ、扨ハ本朝の俗字なり。音義未
詳。扨は上を受けて下を起す辭。偖の字を
用ひ来る。
諾　万葉集に出たり。噎。前太平記に出たり。さもとも用ひ
来る。「さもなくとも」。嵯。俗にもとも云ふ。
副　本朝の語ノ辞なり。「はなはだしくなどの類」
嘸　嘸とは推量の類へ也。領承とも云ふ。もとも用ひて
異説多きなり。口無き従の義なり。
字彙、嘸、音武、嘸然陽應也とあり。
候　サフロフとも。ソロとも訓り。草書のひの字、釋名云
候ハ護也。伺候諸事ヲ也。俗書の来る必候ノ字を用
ひるも幼ナ伺ヒ護の意なり。人に隨て命をとるもまぎれ
なし。又言ふる事の人の氣に合ひや否やを伺ひ知るの
ふるまひ。

草々　草々ハ苟簡の書く、俗ニ急く事ニ用ふる歟、ざつ
書きなる書簡の書く、

草創　創ハ平聲ニ讀ムときハ、金創の創の字ニ成て、傷也、又、
創ハ去聲ニ讀ムときハ、草創の創にて、始メて造也、物の
始めの事ニ用ふる、

草菜　人情ニ通ぜざる者を草菜子と云、田夫野人と同じ、
如し、俚俗兼物を草菜子と云り、菜ハ、アルトモヨモギ
とも訓ず、字彙ニ田廢生草曰菜と有り、

様　此の字を用る事、鹿苑院義滿公の時ニ始まり、
古記ニハ多く見えず、藤原雅世冨士記行ニ云、永享四年
公方様義教公冨士御覽の為ニ、又鎌倉年中行
事ニ云、藤澤炎焼の時、公方様成氏公　洲崎まで御出
と有り、是ハ多く様の始めなるべし、

手之部

きぬぐ　晩の別ニ人と云ものを晩
わかれ付ぬ者ニ云て、
云ぐさ　云ぐ事ニ用ひる、
云ませば　云のあり、ませば、

[illegible]

きんぢら　海苔（ナンジラ）いろいろあり　源氏物語あり

きくらう　いそぐんなり

[illegible]

業平

きびて　日本紀に稚（キビヤ）とあり　おきるなり

きくらん　年の事に源氏物語あり

きくえのつら　嘉の源氏物語又是とあり

[illegible]

きくんげて　源氏物語に嘉の字あり

きくなくよ　ゆくくくくくくくく

嘉の海　嘉の源氏と海とくくくくくくく

きやぐら　あくらに高くくくくあり

きりとあるで　きくくくくくくく

きるごとくなり　沛水の流るるごとし

きすぐ　生直なる文の用ゆるなり　みの作るを出るを

いふ　生のまことにいつくしきをいふ　すぐハ直し　法氏功徳をめ

きなる　蓬なる　郭象が云、非直達者とかの人の心の

卑きなり

きたなる　瀆なる　物のむさぼりとる事なり　○穢邪　古

事記に出る　○汚穢　舊事記に出る　各其の文字ハ遠ざかるべし

元ハ粗目し

きたなごころ　蓬心なる　林希逸が云、猶茅蓬の塞其の心

○黒心　日本紀に出る　素盞烏尊の曰、無黒心と云云　○深心を思

知ることを清心を丹心とかく

きらくしきなる　無分明なる　舊事記に出る

工之部

ゆくて　めぐる方なく　たのめなくて　又説　たの序

たのもしとのこと

ゆきたり　ゆきあてたる　今のごとく　毎のごとくなり

ゆくえ　めぐる　又向後　遺なり

ゆくとこそ　行とこそ

源氏物語

ゆくとこそせばとこそ　[illegible]

はかの源氏のこと　石山寺にて　宮殿の常

陸より帰のぼりて道ひのもとにしるし

ゆくあれば　[illegible]

[illegible]

信房卿詠

ゆくあれば　[illegible]

ゆきふる　[illegible]

ゆきあひ　[illegible]

[illegible]

ゆきふる　文加と云り　[illegible]

[illegible]

ゆとびう　寛の字なし　[illegible]

「池のゆとびうよ」　又　寛なる云もあり

ゆくしき　二義あり　一物のちぐふ人心　又いまいきいる

[illegible]

信房卿詠

かけてつゆ　[illegible]

はかあのちぐふ　[illegible]

河内集

七夕は衣ぬぎそうて夏ぶすまゆゝしゝやうに思ひ侍

けるいまゝてきんし

雲ゐなれの声　わかれよりわかれ井ゐなふのこゑぬゆゝしく雲ゐ

ゆゝしめぬれば雲ゐもまるし

夏のくゝもち　くゝちハ直の字なし直ハ直弱こ夏の夏と

そゝまとゝうんし一説ゝ西ゝき夏とゝうんとゝうゝ

いとゝ

拾遺

見ゝらこれ夏のゐもちにまゝ人ハ侍ゝ

定家

日

そゝれ拾遺夏のゐもちにまゝ

後京極

夏のうきそゝ　只夏の事なし　む秘伝あゝ　源氏へゝ

ゝゝゝ

夢ノ意　意夢ヨリ自ノ夢ノ中ニ出テ人ヲ通テ云ハ又ハ夢ノ
別ヲ云ノ時ハ人ノ心ノ中ニ思ヒ入テ夢ノ中ニ
語ル又ハ夢ノ内ニ夢ノ意ハ意ノ夢ハ其夢ノ中ニ
云フ

夢ノ心　夢ヲ見ルヲ云

ゆめ枕の床　むし枕の床ハ今ハ昔ノ夢ノ
物ノ心ハ夢ノ中ニ夢ノ枕ヲ
こゝろ乱ル時ハ夢ノ枕ヲ云フ

如床の夢　如床ハ人ナドノ死ル時ノ事ニ
枕ヲ云ノ枕ヲ結ヒ
思ノ心ヲ思ヒ
床ヲ射ル　射ルハ射ル
思ヒ
ゆうり　所縁ヲ云ハ小キ縁ヲ
所縁ヲ
ゆゝしのたゆゝ　浪ノ

六帖

[illegible]

古今集

いで[illegible]人なとゝ[illegible]舟のゆくへ[illegible]

ゆゝしけきさきら　廣智の[illegible]さきらん　辯舌の[illegible]

事の[illegible]

ゆくてなく　不意に[illegible]ゆのゝしらふ事[illegible]

ゆくるゝあくかゝ[illegible]

ゆゝしけとも　石とゝ[illegible]

ゆゝしきこゝろ　高[illegible]夕卦問[illegible]

[illegible]

俊軒

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夢のうらし　夢の中よりうらし、ひる文白に「一見ぶる
ゆくゑの夢の夢ゆくたのるるにて、ゆくゑ知らぬ文
夢よなせ　意のあるりふあふ事を示よ古ときしかり、定家
夢のうらう　夢の占ハ夢のうらうと申ものと風俗通云黄帝
作占夢之書と云、
夢さむる　夢の覚ル心、又夢断ともよ、
ゆめ又　即チ夢又ハ、圓夢ともよ、又悪き夢を又人を
厭魅と云、

ゆるしの文　紫をゆるしの文とあるゆるす人多し、紅と紫の
文濃を禁色と云く、是の人ハ用ひ、是文濃をゆる
しのよりうしされば紫のうるかぎりなるべし、
ゆうりの文　紫の文と云、紫ハ女よりあるゆる、紫の所縁
と云く、世の親族のゆうりもなりく、
由緒　由ハ其由所し緒ハ糸の端し、其ハ由所みて絶ざる
事糸の端を抽ぐ由緒とつく、
有識　物を事あらと訓、萬よ心得て故實を知
者を有識と云、俗に博学の公事政と云く辯

委（ユダネル）

任用（ユダネル）

免（エルス）

許（ユルス）

赦（ユルス）

放（ユルス）

容（ユルス）

弛（ユルス）

聽（ユルス）

同又免許（メンキョ）許用（キョヤウ）

法

創（ハジメテ）

メ之部

目離（メガレ）

目不離（メガレズ）

目もだるさ

目ぐれ

古今集

めぐる

めぐりあふ

めぐりき

冷眼（メサマシキ）

貴之

源氏

寂煩（メサハシ）

めづらし

珍奇（メヅラカ）

鈎（ツリ）

神功皇后（ジングウクワウゴウ）

松浦（マツラ）

鮎（アユ）

仰せ

めなれ

めやす

目（ヨソギ）

死ぬんとすめやをかるべからずとぞ。世間行末早世を
好ゝ似るべしと。人はいのちの長短を祈多めんよう
壯年のうちに死せば見と見ゆ。人こそ早世をとめを
なりのたるべきなりとぞ。ものゝ方のとゝまるものゝ
などの方のとゝまるものゝ。見ぐるしき。
めもとのやう 見ぐるしき。又 鏡の役のうつりきとも
めもとるふ 目遥 茅張の二義あり。一は目遥なり。
貫之の土佐日記に。松原目もとるばかりとぞ。又
茅原の茅を張りたるなり 源氏

行幸巻
むかしきのうまうまうま

行者屬目と云云

めぐり　源氏五節の舞に「宇治の矢の尼ぐ河」とあるくのくをとる事なるべし。めぐりは運と世よめぐり作もとりのこと。

めづる　愛し　芳しく

めであざみ　見もたるぐし、おしあざりうんとふく

めぐる河　源氏の花の尾の仕合よきを見

なぐさもの　なぐさのめをとりくく

めでぐさ　結搔ふくらんと

めでくく　けめでくく目出度くくと云云天の窟門の故事より起れる河と舊事紀に詳なり。おのめでくくと

河もけなるよりあるべし。

めや　めやめやと日じくかえりく治定さるよ

めやめやと云云。「たるあるめやたるあるじかえるし。

めあて　的と云楊亀山云學以聖人爲的と云云

めうらたへで家をうらぶ　尚書云牝雞無晨牝雞之晨
惟家之索也とあり牝雞ハ庭鳥の雌ニ晨鳥の雌ハ
鳴をつくらんに晨とハ夜ときをつくる雞の雌の
鳴くらん不吉の兆なるべし必ず家亡し索とハ盡て
家の滅亡をいふ又云謂妻奪夫之權とあり

㊂之部

こりやさて　ゑんて賞美するに　ハやとハ栄有しめてやや
ちくいつまし

山海人もすまぬ海もなぬ流てゐてやさん

人もすまぬ海ハ人も出せぬ海なる流てゐてやさん
くるゑんて出てやさん分の義ハ樣のものよりて
ちく庭鳥ハ雌雄のうつりあハざるを嫌き
なるものなりし又㊂の義ハ世よ出
こまれみてまれ　えるもしてあるもしの同く
みもく　見在云見ること　源氏葵
の巻に見ようもく世ようハ長氣情し　源氏葵
みなまてまれ　ゑんて別儲てあるく　源氏桜の
巻に　こうれてうまて　別ゑんとあて

身よ去む　入身（ミヨ）とゝ云ふ　敵身よたりよそへてもし
身よ行ふ　身よあ敵をいふなり
一ニ云ふ　身よ行ふ花のたのしや春の盛風貴乃名風
身よ行ハぬ　敵身よあ敵せぬ
敵もまた仕せよ行ふぬあそやこぼも花とものぬ名風
仕ものんハ身よ者あでゝ　ふんもら消すもき仕せよ者敵
せぬして　まゝ風ゞ　あ仕ふ
身よいゝづき　勞（イタヅキ）とも煩（ハン）とも人の身の病をゝ
ゝやもるゝ　又いゝづきゝ煩悩（ボンノウ）し身よ苦ひの身

るもしもいて
古今集
嘆もの身ひつ身のあぢきなき身ひいつまれ人もたつ
身をつゝて　こゝ身をつゝて人をつゝこゝろ　信よつま
ゝゝとゝつゝ月
後撰
身をつゝ見べいつもあまり　秋乃月山のあるゝよ人もとゝ
身ハたゝ　信よ云ふ　なんとゝあゝとゝ
古今集
花のゝゝゝ風もゝゝ身よゝ乃ハ
新古今
里ハあぬもゝゝ　風ハ乃ゝ
こゝやび　風姿（ミヤビ）風流（ヨウ）艶（ヨウ）ゝゝ云ふ　即ち風流ゝ

又、ゑびをうハもてゝいつハ情とうハとも、源氏若菜の巻、
「そのゝゝゑびぬゝゝゝゝゝゝ、けゝゝゝゝゝゝ

こさかり　方(ミサカリ)とゝ[illegible]、真只中(マヅナカ)とゝ[illegible]、俗ゝ[illegible]

いよ[illegible]

あようぞかく　あゝ[illegible]ゆの冷(ヒヤ)かくゝ[illegible]

ゝゝ　涅槃經云、如畫水(ユガヒテ)速滅(スミヤカニキエテ)不久(ルカ)住(トヾマラ)文(ブン)

もゝ

こゞゝきの沢　水茎(ミヅグキ)の沢とゝ[illegible]

松のつゝ　松のゝゝ[illegible]つゝ[illegible]古歌(ミヤゲ)とゝ[illegible]

月

松(ミチユキ)ぶり　[illegible]

古今集

[illegible]

[illegible]　御所の拾(ヤウシ)を上ケ[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊勢物語

[illegible]

[illegible]

定家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

爾そともあく

たうらいの　云爾と云、如は云ふ事爾りも濃く用ゐる

たうのも　爾而已と云く、如はのこと

たうのもなるび　如はのこるびとらるる　加旃の爾乃至若

ちとこと

たうるぐ　れうでとあうるぐ　たうるとたれと云ふ

旨爾の字のとあり

たうまで　不若の不如の曾若なるを手く不定なる詞又なる

ちとこと詞もあるなり

たうなるしても　たれなるとらる詞

たうるき　著とあれとあるる

たのぐ　凌とあ風波露霜暑寒雲なるのくそ

詞たのぎこのあらくうのとらまく

古歌　渡子の家世の秋たのぎ弱なるくく雪おそくてやまん

古今集　わくらはのもぐのもたのぎ降るるれはめとらいそん高のとばき

後拾遺　夏山のすきれ紫たのぎ降雪とくぐきとあるれ

たうぶく　たぶくとんぎしるる　たうせ毋たぶくまるる

なのなぐ詞たぶ　はんにたなぐ　流るゆく舟の押

めくるくること。

下(レタ)ことえん　ことひとらてともなくんの屋よ思ひとどくことく

恋の河く

ちるぐせよ　ひとちるぐせるくだたくて　恋ちるあるこく漕(コギ)出ちる

舟八行方(ちるこ)もの　風のこ伝ちてものくんのきあ

ムとつけて　ちるぐせよるこいて

恋のびつく吹　ちのびつく吹くハ秋風のいまるこ友ちよ吹く

とちるこ秋の初風よ海ちる　思ひいて吹くく

思(シノブ)ちる河　前ちのぶハ昔を慕(シタ)めくく。恋の思ハ限ちこ

又堪忍(シノブ)の忍ハ　ちのびつく

ちるこ　海ちる事く　恋ちるの物ちれば海ちて神ちちる

くくちとして　遊仙窟に泣涙(ナミダ)ちくこ未名ハ讀(ヨム)

ちるこけなく　源氏帚木の巻よへ直衣(ナヨシ)だちちるこけちく

恋ちるのひてちる日夜(サヒヤ)蒙(ヒ)ちるりでありのまちる思(オモ)

ちるく無静(シヒヒケ)氣ちちく今も伝ちちるこけちちる

いちる河く

ちばく　數(シバ)くちちく　ちばきちく伝ちこ海(ウミ)ちちる河く又

屢(シバ)ちも事り匂會、頻數也ちちる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海人笹の篠ずゑよりもとくるる

あしたづのこゑの里は笹の葉に雪ふる時ぞ寒かりける　俊成

志のびね　忍音し郭公よ海人の月を己が時とぞ鳴く　卯月

志のびねしいよ卯月の比ぞ志のびねする鳴くゆゑ

志くめる　志くめるハ志きりこめるハ風で志くるゝ風の鳴志きる

志くハ志きりこめるハ酒の肴ゝ風ぞ志くるゝ風の

志きりこめる鳴くまこと

知るらんや志ぐれもいとゝ世のさがに風で志くるゝ

志でうち　搗衣のおとゝ志でうち音とゝ志でうち

志き志のぶ　志きりこめる忍ぶし酒方ゝ搗きものさびしく

志きる忍ぶ志ぐしつゝ鳴くまこと

志みく　志げきりこめ　高も志みくるゝ海の志げき

んこ　奥義抄繁しと志りこ

とゝ志ふとけるの海の松ちゝ元ぬ志ぐしこ

時しあれば鳴くうゝ鶴ものゆゝ小萩ばら志みよ

志めゆふ　我ゆゑ鳴志ぐるとふし

於建集

山ちゝ文ちゝのあさぢ原ふゝ高ゝ志めゆふ

芝うり　春の忍ぶうりんこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今集
[illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今
[illegible]

俊成
[illegible]

千載集
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]通ハ[illegible]故事[illegible]
俊成ハ臨期變約[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
長きりのこと
[illegible]
和方の[illegible]道[illegible]又[illegible]ハ日本の事

[illegible]
試樂[illegible]
[illegible]樂のこと
[illegible]事ハ[illegible]何の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]盛親僧都[illegible]
[illegible]智者[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

みるぐ〻剃髪染衣の姿よりてナマナカノ人を利益もろ
ものを説るものあるべし。此ノ説を
以て自得利の実説とまもるべし。是等の時の身よりも
詩ありて信ぜるべし。名まあり。第四法師もまもるべし
ものもの〻ものは迷ふ物のあるべしとまもるべ
詩句

七歩の詩　魏の文帝、其弟の曹植が才を忌んで、是を
害せんとあり。七歩の間に詩を作らしむ。曹植其声を急ぐ
五言四句とあり。其詩云

煮豆燃豆萁、豆在釜中泣。本是同根生、
相煮何太急。

と作る。此の詩の意は同じ兄弟のあ〻
豆と萁の同じ根から生じたるものなるに、何として太急に責め
のみぞと世説及蒙求等にあり。

燭すの詩　是は灯に寸にして詩一首を賦まし。竟陵王賦
詩約四句一刻燭一寸と云云。燭を刻とは蠟燭の一寸刻間
南史及事類別集出り。今俗間に五分線として線香五分燃間
歌或は發句などを吟ずる事とあり。

絲竹遊　管絃の事にいとけの遊びにもいて。絃は糸、管は

竹に四の字に出る

棲遑遊　無言の戯なり　源氏物語に出る

仕途　仕途とは奉公の事なり　諺に頼朝のことを仕途なりとなり

俗にあることを仕途なきと人なと云ハ誤なり　類書纂要

云　仕途作官日在仕途とあるなり

自負　自負とハ自負と訓て自慢する事なり　我が智を至

極と負りとなり　前漢書云高祖乃心喜自負と云

鹿見て矢刻　戰國策云見兎而顧犬亡羊而補牢と

云語より本づきて云て藤原雅康矢ぢの里と云て

詠る歌

ものぬるかたもなきまでなるとて所を変の里とぞなりぬる

ひとのもとに軍をもとめて矢刻の語よりなる歌なり

處置　處置とハ事を云て捌く事なり　處とハ事を取

詳事なり

皚々　文選註霜雪白き貌なり　即ち白妙とよむ

ちちちちと神ちいさん花開く　古の世ぐぐハ皆白し

ちちちちと

ちちりぐ　和泉式部百花ちちり新を鶯ほうほう良

をとりて爲有良ちちり

上を絶つき　上のうつくしき　古枝のうるはしと上のたり

自負すること　自負とは自慢のこと

さくむ　舌訛とかく　訛謬すること　結句言とかくこと

ためやう　深沈とかく　又蕭然　恬然とも書く　傍傍を

「ためやう」物腰　上の作法　上のやうと

ためぐ　見ハ澁くとかく　物の雨澁して点りかたきこと

ヒ之部　ヒハ上ヨリ出ス

人めなる　人目をかること　御方思意を御

人めづく　人目をつゝむ　御方人目包と川の堤を

思川　洞川　思ひ川　御方思ひを御

古今集　思ひとも人めづらるあるかなこと　思ひ

拾遺集　人のきらふ　人のゆるくこと　体なし

人めなる　かるくハ離の字　人目のこと

人まもる　外より人の見ること

後撰集　義氏　ちきりをいつゝ　敦敏

人やとなつぬ　他人の意を　きしもるそハ　あが

ゆること　御方　張り御方　もも人のゆること　あと　あが

人のかさうらのなるようあり

千載集

春ゝ初めぬ秋の月ゝ千ちゝ人ゝゆゝのゝなゝ

古今集

人ゆゝりのゝ[illegible]

けふのゝ人ゝも人のゝ[illegible]

新古今

[illegible]

人のゝ[illegible]

ゆゝ[illegible]

人ゝのめ　人ゝのゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清めてをくべきのみと云ふこゝの法合あるべし、いづれもけん
一説に云ぶのもの用ともあれ、此説用あだらんに、云ぶのあ
いまだたしかならぬもの、ゆづりあるべきもの、
人の秋　人の色とあきらるゝ人のをれていて、高き所
人のまれ鬼よまれ　人まあれ、鬼ともあれ、あれとも用ん、
接の通ひ、ゆゑあれとまれとつゝ
人ともいへ　人ともいへば他人の事とつゝ、又我が事を
人とてもいふべきものなり、人のありさまをせるごとつゝ
云ふべ人とてもいふべし、

いまてうもあとをすぐで人をつかるゝ者をとゝいづこつゝ
行もゆきまもとゞ人のはらせて元たの所をやかりとゝん
思ふの分に云ふあるべとゝいふべ
人の情を世にしる時　人のまゝとする情けをうるハこと
人の世をやとあらもしく云ふ人が縄目をうけてを
今までに情しりて者も云ふ所をるハ世の
やうしなくゝ。菅家御集、菊童人左遷のこの分
あそれ我ら今までの所人の情ハ世にあるを
世間分のんで仍る杜甫ヵ詩

翻手作雲覆手雨紛々輕薄何須數
君不見管鮑貧時交此道今人棄如土

△唐詩選七言古 貧交行 杜甫 杜甫ハ即チ杜子美ノ事ニ此ノ詩
言今人交リ不如古ニ警世俗ノ也 為体人と云ものハ如何
富貴ならんハ貧なる者をつひ棄し今時の人ハ淫をこゝ
知る軽薄ならい掌とかへすこゝ雲とかへすこゝ雨とかへ
いつハ忽チ変ルといつし紛々と多く世界中か為ひ
者ゝ数つくされぬ輕薄とハ疎情のこと古へ
管仲と鮑叔貧賤で鮑叔といつくハ金持でいつるも

中ゝ管仲か云ふも生我者父母知我者鮑子と云テ
イヨ〳〵交リを深くしたる今の人ハ金ゝ有れハ交リを
棄きて土の如くゝ思ふ 君不見とハ泛指世人シ
辞唐詩選掌故よりとる
ひとりごち 獨言し人に聞せぬつぶやく詞
ひちて つゝ濡るゝ 神ちてゝ神のぬれ
ゝるを云ふ
古へ集 神ちて 賀之

ひさかる　一向（イチキヤウ）ときこえて、又日本紀に、永のゐまとヒタフルと
讀り。○源氏、「山田のひさかるなどつくりて、田に引板（ヒタ）
とりあてとりけるとあるなどは、ひさかるのようなるなり。
○引板は、鳴子（ナルコ）の類。

詞花集　ひさかるは山田の見しめ嵯峨の人をれどうらなく　能因

後撰集　ひさかるはひるはひとびとうちつれよるは人乃ねられぬよんのつる

ひるのまれ　田舎（ヰナカ）にて別（ベツ）もとる。

ひとりやゆく　ゆくをとりていふ。

後撰集　むさしなるのてりもとりあへぬるなどあるべし

ひとのひかり香（カ）　他國香（ヒトノクニノカ）とも、反魂香（ハンゴンカウ）といふ。漢の李夫人（リフジン）
死して後、帝寵愛（テウアイ）の人、ひかりて反魂香を炷（タキ）
ければ、その煙の中にまぼろしのごとく、彼李夫人の使（ツカヒ）の
人、元のごとくなる。

ひさげ　日煩（ヒタヘ）なり。源氏、須磨の巻に、人をひさげ
ん行ねばいとゆいなるべし。○註、ひさげは人
鯉（ヒケ）くみぎうき所とあるなり。かくるるの儀
しきとひさぐと云。ひさげは高の巻にもとりあつ
るなり。高貴の人乃權勢（ケンセイ）あるをも欺（カク）
いふ。

ひさおして　遠く対面をとりて。向面と書り。
ひるのびらる　田舎のきらうし。鄙(ヒナビ)卑しくあるべし。
ひさかたのそら　久堅(ヒサカタ)。天地月日。天といふん花
詞。又雨。月。星などの花詞なり。ひさかたと重ねて。天と書。
限なし。

古今集
久方の月の光のつれなくは秋を待つべきかたもなしん
ひまもなく　あるこうるもちびくるし。
ひめとく　秘(ヒサク)花なるし。ひめたくい。花(ハクヒン)貴くとりつる源氏
給金の意。ていていひめてしたり。

ひごろ　ひごろとは日。徒然草よ。碁盤の角(カド)よ
石を置てはぐくよ。角をまもりてちびくらは中(アタ)
れがるをえとりて。さるひごろあと置てちびけば
ものうるえ。必ずゆるるなり。
ひらきかる　山河の花を始ひらくるお茶碗を
ひきうるひて。ほるる鉢を云。
ひさに　久しきこと。幾久(イクヒサ)しくいるびとうるし。
ひたに　一向とひたすらと訓。意なるべし。徒よひら
のとうるは。源氏物語なり。

ひるみちに　ときひらえどる。一筋ある長い迫をとる。源氏

ゆきてえて。

ひるやごりの　源氏源氏の色よ。「ゑんじゃうきてるものひるや

ごりのてやハ」なる。世てとる。又、蓍の色。「あきらあ

きとゑてとるあやるれど。ちぐのつとハ。ひるやごりのあやを

。ひるやごりのまま。花況あんれど。只一筋ある長ど。

詞のありてよ。さりりと云るのあるをつて。籠てるとなんし

えるは。解をなやまりぐて。さりるハぞるのこりるて。

分のこりるえるるるいぐ。一筋。永屋籠。直蟄ちど

ゑて。引篭りあるまま。しとしてる。

ひるるなき　源氏父君の色よ。「ひるるなあるとるじるる。無美

相家カ自ものこ。家カ自ハ家とまるるひ。をもむる女ッ云。

カ自をとるぐ。のぐるしてる。

ひ。あやるる　火危と云り。○火あやしるる病ものの者乃

ゆびるりし。源氏父君の色よ。「ひるるをてる」

ひきるるる　引筆し。源氏百合賀の色よ。「帯を引き

ときるる。ぬがせ玉ぐ。ぬうぐるをりるるを引ちるるる

。帯を解ぐるる。ぬるるハ人とるる合ふ

ひがさま　源氏蘭の花よ　陪（フチバカ）ひがさまとて
人々中とも。僻様（ヒガサマ）とも。正一かぶりとも。
ひねる　源氏玉の花よ　ねをとりてひねりて玉バカ
。玉を結ぶとひねるとひねりて。
ひきかなぐる　引のこるを　ねをとりて隠ることをかなぐるといふ。
びんなでぎ　鬢（ヒン）なでとも人を懐（アシ）む詞。又いそぎきるをもいふ
いそがきるをもいふ。
ひきたれる　昃（ヒイキ）屑（ヒ）ともいふ。かしらきをのうへにかぶりたるを云
十訓抄、信光法眼の詞

ひきこのかみ　ものぎさ　法師ほうしなどをいふ
人ちいぎ　いぎたん　紹（イザ）ぶたん　年を詞。所知まり
古今集　人ちいぎ　ちとせ　ちとせもいぎ　ちとせもいぎの事を自しらず　撰定

㊥之部

りんこのこと　詩をの作りの分ちの分ちの文字をかく分も
いとく　詩（カラアヤ）と訓（ヨメリ）
ものとこと　ものとあり　ものとこと。
ものとぐもり　ものとぐもり　ものとぐもりの紙さぐりとも
齢のぬけくろ

古今集

さくらばなちりかひくもるあをぞらは
をのうき　なごりなくふるはるさめ

「をのうき」とのうるまの字にはよる
そんじ又うきとをのんうも用ゆ

をのうら　なみだぐましつるかな

又をのあまをよのんうも用ゆ

さくらばなちりかひくもるあをぞらは
をのうれ　なのあはれとやなごりなくふるはるさめ

おくてもおくとうんし

新古今

ながらへばまたこのごろやしのばれむ
うしとみしよぞいまはこひしき

別の意あり

けふはまた別の情の意ときけばなほ別なり

ながらへ

ながらへばうんし情がつよくし

もなく　もは喪のうへし喪はワザハヒと訓じ　もなくはなくとうんし

伊勢物語

もとより人の心はうたがはしくもあるかな

これは人の心をなげくなれば喪のなくとうんを喪のな

きとうんもあるべし

をのなれや　ふかくよせしたのもしさよ

又あはれとうんしたのもしさはやはりなげ

古今集

なのみをあるとうんを云ふもあり

なのみをあるとうんあるのやゆゑもなくとうんを

はしのくちあるのうやくいつかしとうめてとうる酒にんにあるまぐりのきを
下紙のいろでくやくうるぐしどぐんていのうしに人うをまつうう者ハ
うのうぐ紙のとうるいつるものあるのかかく酒
りゆる　萠（モエル）と云く草木の初て生ずる也。禮記ノ註。屈生（クツセイ）日（ヒ）勾
芒（ボウ）直（ナオシ）出（イデ）ル日萠（ホウ）と云云
りこぐさる　りこぐさる。りこぐさるものりこぐさるなど
なるおるとうるる。おるうるぎるるうるうるる。夜木のあるあひて
ぶ　草ぐさ紅葉（コウヨウ）るといふる。
りこぐせぬ　見ル枝枝のうるの紅葉（コウヨウ）也あるとうて。

りこぐぬ　おるぬせぬ。
おるぬぐり　おるぬとるるるるる。即チ紅葉物と書り。
おるぬるる　紅葉を焼（タク）る。林間（リンカン）酒をあるるるの故事。
おるるる秋のなさけ物るも物のるや行くぐるん
なるひるる酒のるるる酒。
りゆる　元（カ）の香のといふ事。つるる家宝。
りゆる　催（モヨホス）と云。物の用えるる。
家宝の行くの山用見のるるるて家りる　定家
ものいひるるぐ　言語道断（モノイヒシラズゴンゴダウダン）と云。ものいはるるといふ

ことのね　笈絃(クヽンゲン)の事。

りてるのあこ　りてあつひこる弾し源氏桐壺の巻、人の
りてるのあこごさるのてとなる。偽り人のこごさとふる事。
こさとん、稚(チ)のこのかて事をとんのこひるごもむ稚(ダ)と通
りはる　たゞ焼く塩のこと。ものあく事をもて
いつく。

風雅集
和哥の浦に塩焼く海人のもしほたれつゝもゆる恋かな
りゆる　思ひとゝの火の燃(モエ)ゆるこゝろ。

りえさて　庶るのうの人はとて人のこひのやまん御(ゴ)せ

もゞな　どゝのぞとねるのこと。塩こゝろもゞれ。もゞるなど
新の用。

いくたんぐの中ぐさ　赤ひこ自は一節もゞる
もこゝろ　源氏蓬の巻。ものくさうのてひこれて。もこ
ゝろとなる。日本紀。遥遥(イダ)のこゝをモコヨフと
訓(ヨミ)。足も立(タテ)ずして脇ごいはの島。幸ゝてゐるこゝをんな
なのこゝ萩　なトはのこゝるこゝ。萩を一トくだ(ヒ)ゞて
塩くなごこゝろ。

秋の部

古歌さまざまもむかしのんどころ
ある人は哥の題にて云、萩を一ど せばくして植ゝ
ぞえ歌 もとゝ ぞ植ゝ 咲るとゝ ゆかしく一ぞて
ゆつともきるゝえつれども けは萩なかゝ萩ゝ 赤萩ゝ
奥別哥 ゆかしの萩もし 古枝よりまき枝なりて 平枝
ゆさゝ ゆかしの哥 ゆかしの 古萩と 取ゝ
ものゝ ぞれ 世俗の言ふ詞ゝ ものゝ は言ゝ ものゝ
りの中ゝ ゆかしぞれ は 誰と云ゝ 誰ゝ ありやゝ
タゝトと通言ゝ ぞ ゆゝ ゝ

⑦ 之部

せちゝ 切ゝ ゝ 切の ゝ 音と通ゝ 切ゝ の ゝ
ロチハツと通音ゝ せちゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
破ゝ ゝ 源氏 ゝ ゝ ゝ ゝ

ぜく 源氏 絶句の ゝ ぜく ゝ ぜく ゝ
ゝ ゝ ゝ 絶句 ゝ 絶句の詩を作ゝ ゝ
五言絶句 七言絶句 ゝ 絶句の ゝ ゝ
ぜく ゝ

ぜう 俗ゝ 物の ゝ ぜう と云ハ 饒の ゝ ゝ

穰のうのことを用ゐ。穰も多キし。古哥ニ

大和ものがたりの歌の詞にあるうぎ蕨なる

せんをとべなるこ　落方なきこいかるまじ。をとべなること。落度きも

ふきし。古今集のもの。

をとめの、ゆつべなるれば、ひやうのく、あそんく、

なけきあまり、せんをとべなるこ、あけくらいで、下畧

いせんをとべなるこも落方なかりしのえん

せめてさん　せめてさくだとの用。

せくそこ　消息。ものをとゼくそこのコトクと通音

なるべし。

文通の事をいふ。又文通なりとも使をやとりて取なる

消息をいふ。又せくそこといふ。文をやりとりすることを

事也。又盗賊のよもの。

せくさい〳〵　小采ハ双六の小貝をいふ。采ハ骰子也。又

頭子とも書。源氏常世卷の巻よりすぐろく打ものを

せちにあつまりてせくさいの声でいとまとどきわ

ふるまとどきとハ舌ものいふこと。せちのみ古

おもしろくなかりし。

せめぐ　鬩と書。モトルるも。アラソフも。ヒシメクも訓て。

ぬやぎ戦ふ。墻と云も。兄弟不和の謂に。

毛詩に出タリ

青雲志　若かりし時分より。宰相なんと立身の志

あるを。青雲の志といふ。青雲の字は。見史記。同書

註。青雲。謂登仕ノ路ノ也。

善哉　大智度論に云。勸喜讃言。善哉々々と再言ふ者は。喜

之至り也と云云

㋐之部

さぐく　集と書。聚りて声あるく。出多くの集り

と云。されど声のき常なるの数も多く集るくるとび

集くるとて。又人の多く集ること鬼とぐ

あどつ人の多く集くるとる

作法物語

もくくあるる和のうもと鬼なぐくる

すぐる男。昔の人をうげたえて南の和は乃月

源氏接笛の巻よりあるき天逆ぐすぐるありて歌

あるひものてとる。巻八夕雲の歌逆の多きとる大き

出のくく集て作てあるびとくき云る日ひくく。

すさふ　風ふきふかぬ事の作りもの。風ふきとまる止む

風吹きふく風の吹くなり。風吹きさまる風の吹止む

すさむ　愛（スサム）　愛しなり。あと愛（アイ）とかくなり。又興（ケウ）ずる事なり

いとす。

すさめぬ　見ハもしやめなり。不愛（スサメズ）　あるも出やすし

古今集

山風にあらそふ雲もなかりけりすさめぬ春のにしきなりけり

すさまじ　見ぬ物ぐさまじ。見ぬ物ぐさまじ。見ぬ物ぐさまじ

見ぬ物ぐさまじ　口号（クチスサミ）なり。又、戯（スサミ）なり。愛（スサメ）の号なり。

すさまじらず　すさまじらず。見ぬ。荒（スサメ）　蕪のなり。

ゆくすゑぬ　ゆくすゑぬ　ゆくすゑぬ　ゆくすゑぬ　ゆくすゑぬ　乃至や

すさびて　過難（スギガテ）なり。すぎがてなりといふなり。

古今集

あかなくに　あかなくに　あかなくに　あかなくに　あかなくに　あかなくに

すさべなり　作るなり。すさびなり。

古今集

あかつきの雪とともにすさびなる　すさびなる

をかく　鞠の糸をかくなり。又氣形門の糸門あり

すさぐる　携（スガル）　日　縋ともあり。神をもすさぐ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

見ハ昔、男女のあるが、末の松山をさして、彼の山よ浪乃
越ゆらんは、ことを思ふ、なるべし。
つきてゆるるなり、人のひかるるを、浪とそしらん、彼山、
まことに浪のまもあるべし、アイダ
立浪の彼の松のよりあるもあるべし、
浪の越ゆらんは、ひとをもて、
人ハ山砺河帯と誓ひしは、山ハ砺ハ、
河ハ帯のごとく細くなるとも、
ことつたへ語まの松山の浪を松ひしるべ
なるべし。

さてさまで　冷（スサマシ）

荒涼（スサマシ）とあり、冷の字のそこなし。文選の註、悽慄（スサマシ）ハ寒ヤ見也と
ゆゑ、顔師古ハ云、寒涼（カンレウ）戰慄（センリツ）之處とあり、又世よりの
さぎ、きとも、すさまじとも、源氏物語、あそびなど
さてさまじきなれば、見ハそれ、のはきなる
をもいひとなり、又清少納言のまくら草子、
くく。

墨ぐれ　書の文字、古くして、ゆきくれあとなり。墨枯（スミガレ）
と云ふ、なるべし。

すゞこ　蓴ふ云ふ河し。玲の降る事をさして明るぬ
ゆふ白ちるとも名と降るつゞの落し。玲を捺とも
色まれ。

すゞろきて　すゝむとも人のうかれゆくを云。源氏物語
又くゝり。

すゞく　源氏桐壺の巻に「そがくとる」まのゝせもまう玉ハ
ぬくりと云ふ註。速々と云あれどゆくとゝ。すゞくとハさろ
ぬとして心はかるらぬるし。神代記。清のうとスガくと
訓。ゆきもゆのきうくゝさろ云なるべし。

すきゝぐ　源氏帚木の巻に「さしもあらじあためるまろ
うちつけのさきぐしさるゝこのまゝうぬ所なは
みてゝ。うちつけのさきぐさゝ。ぬるゝ
るゝ所のるハ。姿ゝ玉ハぬ。ぬるゝ
すきゝ。色とぬひるゝ。つまゝとうるゝ。

すゞろ　すゞろと。漫行と云。スゾロアリキと訓。めるに
歩ゝ。あてどなゝと云。源氏物語に「源
氏物語に「源

すく　すくゝ物を食ふとゝ。日物語に「源
少將に山ゝ入り。一ゝ日ゝ。穀を断。松の葉をすきて

とゝ。源氏物語に松の葉すきて、つゝむる山ゐと
ゝ。日本紀に以水ヲ送飯（スカ）とあり。送の字をスクと訓（ヨミ）り
いづれも物を食ふとゝ
すまひ　源氏五節の賀の巻に中将等を引きて
ぬぎ捨玉へぬ。すまひ。すまひ人とゝ
合ふ。組ふ。
すり　修理（スリ）とゝ。即（チ）修理（シュリ）し。破れたるを繕ふ。
源氏澪標（ミヲツクシ）の巻に。いとゝ。すり。つくらひ。修理（シュリ）とゝ。

すぎはひ　源氏絵合の巻に百ぶのわかを多くすぎ
白とゝ。百歩（ヒヤクホ）の外まで引きもをく白ひきものゝ
ずんながれ　ずんな順（ジユン）し。盃ゐぶの順（ジユン）をめぐらすとゝ。源
氏物語に出たり。同書蓬の巻に。つぎ〳〵に皆
ずんなぐるとあるも。分を次第（ジユン）に廻すと。
皆もこのずんハ順（ジユン）し。
すみすまして　清（スミスマ）すとゝ。法華経に。つゝまれたるらつゝまれ。源氏相
木の巻に。ものの心ゝ知りあるかの人のすまして。
すがやら　速（スミヤカ）とゝ。源氏柏木の巻に。すがやらに

なぐ云ふ事

すまひ　相撲の角力の角觝並に垂仁天皇の朝に野見宿禰當麻蹴速と力を爭ひ蹴速が腰を蹈折て

日本紀に見えたり是相撲の濫觴し又聖武天皇の朝に相撲の節會始て行はれ諸国の相撲を召て衛府の官人なども相撲をとらしむあり衛府八禁裏守護の官なれば武術をたしなん為し又頼朝卿の比八名あり武士常に相撲を取らしむ又是をおこなひしなり

㊐の部ふもの

駿河舞　俗説に駿河の国三保の松原に天女降りて舞ひしふ白龍と云ふ漁人傍の松の枝にかけ置き衣かくして隠れ密に取て隠し置ぬ天女衣を求めとしびかなりせば是なり白鳥に使ひして後かの衣を取て天に登りしとふ駿河舞ともいふ又鴨長明が海道の記云むら〳〵稲河太夫とふ人天人の濱松のもとに樂を調べ舞ひしを見て学びて舞ひしに又人のうたをうたひ舞のあくまで舞ひしに是一つの面形を着せり古夫

色を[illegible]寺の宝物として[illegible]寺より[illegible]
法会を始行す、時六宇土の濱の東北に在り寺[illegible]
二月十二日常樂會とて寺中の大管[illegible]後天人降り廻雪ハ
春の花の如く峯よりそゝり曲風八年月の声浪よりわたる
ようてけ濱をとゝれそゝ行よ雅吟あて浪よ鼓の音ハ
天人の樂会ゆゝ似たりとゝ

長明

[illegible]天津乙女が袖ふるあとのこゝ
すゝみがてらに　源[illegible]

大原や七ヶ井の清水かけてすゝ[illegible]

すゝ[illegible]　須とめ[illegible]可爲を一字のもとゝる文字なし、すゝ[illegible]
くとゝ[illegible]ぼ、ぜんぬ事のゆゝよ南ゆゝ[illegible]可爲とゝ[illegible]
此字を下知須と云し、ず[illegible]何ゝ[illegible]と必ス上へ
のぼりて讀ムし、かゝゝよせよと下知[illegible]
すでふ　既とゝ[illegible]最早とゝ[illegible]辭よ當ヒリ又已とも云

内閣文庫
宮内省書陵部
宮内省書陵部
宮内庁書陵部

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan